

高等学校日语教材

日本古典文学

崔香兰◎编

横山邦治◎监修



H36
C97



大连理工大学出版社

高等学校日语教材

日本古典文学

大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本古典文学/崔香兰编. —大连: 大连理工大学出版社,
2001.3

(高等学校日语教材)

ISBN 7-5611-1881-3

I. 日… II. 崔… III. 日语-阅读教学-高等学校-教材
IV. H369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2001)第 53998 号

大连理工大学出版社出版发行

大连市凌水河 邮政编码 116024

电话: 0411-4708842 传真: 0411-4708898

E-mail: dutp@mail.dlptt.ln.cn

URL: <http://www.dutp.com.cn>

大连理工大学印刷厂印刷

开本: 850×1168 毫米 1/32 字数: 178 千字 印张: 7.25

印数: 1—3000 册

2001 年 3 月第 1 版

2001 年 3 月第 1 次印刷

责任编辑: 王佳玉

责任校对: 金 禾

封面设计: 孙宝福

定价: 20.00 元

序言

中国に於ける日本語教育は、教育技術者（教師）の言語能力の高さと受業者（学生）の熱意と資質の優秀さによって、目覚ましい成果を挙げているといえるようである。例えば大連外国語学院日本語学院の本科生の場合、狭き門をくぐり抜けてきた選ばれた人材という能力の高さにもよるのであるが、入学するまで日本語を一語も解さなかった学生が、三年次生になると日常の会話はほぼ不自由でなくなっており、相当に高度な内容の講義もほぼ聞き取りが出来るようになっていたのが実情で、日本に於ける英語教育の達成度と比すると格段の差があるごとくである。

こういうように見てくると、中国の日本語教育の導入部分のテキストについては、中日合作になる『中日交流 標準日本語』を含めて、中国の人にとって有効な方法による編纂がされているのである。うと思われる。しかし中級上級のテキストとなると、その内容に問題点が指摘できるようである。これらのテキストは、当然のこと近現代文学の諸作品が採り上げられているのであるが、その選択に典型性の欠けるところが多く見られ、作品の内容に片寄りが見られるだけでなく、本文の誤読による設問というのにも時に見かけるごとくでさへある。

しかしそれだけが問題なのではない、日本語学習という一点集中主義は、中国の人たちに日本の文学と言え近現代文学のみありという錯覚を与え続けているということである。恐らく魏志倭人伝以来の二千年に垂んとする中日交流の歴史を考えると、古代から近世に至る日本の古典文学を軽視することは、やはり問題と言えるであろう。それだけでなく中国の日本語教育を受けた人の日本知識に片寄りが見られるのも、せいぜいこの百年あまりの歴史の中の日本だけの知識で、それを日本の

全くと短絡的に捉えてしまうとそこから生じているようでもあるのである。

中国と日本との交流は、文学の上でも千数百年の歴史があるのである。それは一方的な日本の受容という形であつたけれど、その受容の中での変容が、即ち中国の文学の受容の仕方の中にこそ日本の文化の特質がみられるのであり、その実態の具体的な理解の中にこそ日本の全体的知識の獲得があるように思われるのである。中国の大学に於ける日本語教育の中に、古典学を定着させなくてはならない必然性があるように感じられてならないのである。日本語を学習しようとする大学生三・四年次生のカリキュラムの中に古典学の効果的な定着こそが望まれるのである。そして日本の古典を現代語訳によらない生まの読み方に習熟していくことが、本当の古典学なのだと実感してもらいたいのである。

本書は、如上の考えのもとに編集した日本古典文学のテキストである。古代から近世に至るまでの文学作品を、総体的に典型性を求めながら、日本文学の歴史全体を鳥瞰できるように考えた上で、個々の文学作品が中国の文学をいかに受容しているかという点に特に注意しながらそれぞれの作品を選んでいったものである。このテキストの学習を通して、日本文化の特性を理解していく端緒を得てもらえば、私どもにとつて望外の喜びである。最後に崔香蘭先生の日本古典読解力の深さが、このテキストを産んだことを明記しておきたい。

横山邦治

二〇〇一年二月吉日

前言

本书是为日本语言文学专业的硕士研究生『日本古典文学研究』和本科生高年级的『日本古典文学讲义』课程而编写的大学日语专业教材。

本教材主要选收在日本古典文学史上最具代表性和普遍性并与中国古典文学多少带有关连的作品。这些作品是按照上古、中古、中世、近世四大时期，分散文、韵文两大类而进行排列的。书中附有『文学概观』『作品介绍』『作家略传』『词句解释』『文学用语』，并在书后附加『日本古典文学年表』『日本の旧国名と県の地図』『西暦、年号对照表』『古典文法一覽表』等内容，供学习者参考和查阅。本书具有常识性、规范性，未加入编者个人观点，以求学习者自由鉴赏。

本书在编写过程中，参阅二十五本书籍、辞典，特别是得到日本文学博士横山邦治老师的指导和协助，在此一并深致谢意。

由于编者学识水平有限，书中难免有不妥之处，敬请各位专家、同仁批评指正，以便在重印、修订时改善和提高。

崔香兰

二〇〇一年二月于大连

目次

前言	1
序言	3
日本古典文学概説	1
第一章 上代文学	3
上代文学概観	3
第一節 韻文	4
1 万葉集	4
2 懷風藻	11
参照文献	12
第二節 散文	15
1 古事記	15
2 日本書紀	18
参照文献	20
第二章 中古文学	27
中古文学概観	27
第一節 韻文	29
1 遍照發揮性靈集	29
2 古今和歌集	31

3 和漢朗詠集	36
4 梁塵秘抄	37
参照文献	38
第二節 散文	44
1 竹取物語	44
2 土佐日記	46
3 伊勢物語	47
4 枕草子	50
5 源氏物語	52
6 更級日記	56
7 今昔物語	58
8 本朝文粹	62
参照文献	66
第三章 中世文学	74
中世文学概観	74
第一節 韻文	77
1 新古今和歌集	77
2 菟玖波集	80
3 閑吟集	82
4 五山文学	84
参照文献	85

第二節 散文	90
--------	----

1 方丈記	90
-------	----

2 平家物語	94
--------	----

3 宇治拾遺物語	97
----------	----

4 古今著聞集	98
---------	----

5 徒然草	99
-------	----

6 太平記	102
-------	-----

7 增鏡	105
------	-----

8 風姿花伝	106
--------	-----

9 謡曲	107
------	-----

参照文献	112
------	-----

第四章 近世文学	128
----------	-----

近世文学概観	128
--------	-----

第一節 韻文	132
--------	-----

1 和歌	132
------	-----

2 俳諧	133
------	-----

3 狂歌	137
------	-----

4 川柳	138
------	-----

5 漢詩文	139
-------	-----

参照文献	144
------	-----

第二節 散文	146
--------	-----

1 『伽婢子』	146
2 日本永代蔵	151
3 曾根崎心中	155
4 奥の細道	161
5 雨月物語	164
6 源氏物語玉の小櫛	168
7 南総里見八犬伝	171
8 金々先生栄花夢	174
参照文献	176
付録	184
一、日本古典文学年表	184
二、日本の旧国名と県名の地図	196
三、方位時刻表	198
四、西暦、年号對照表	199
五、古典文法一覽表	207
六、参考文献	221

日本古典文学概説

文学は、文字の発明によって始めて記録され、記録されることで始めて人間の文化として生きてくる。日本人は自ら文字を創ることはなく、中国から輸入された文字（漢字）を利用することによって、自らの文学を記録し始めた。一般に万葉仮名と言われる表記法がそれである。いわゆる古代の文学は、漢文と万葉仮名で表記されたのであるが、古代末期から中古にかけて、日本語の音韻に即した仮名（片仮名と平仮名）が漢字を利用して工夫創始されて、それ以来表記法に幾変転はあるけれども、漢字と仮名を併用しながら日本の文学は記録されてきた。

こうして記録されてきた日本の膨大な文学作品（日本では、文字表記資料が戦乱などで焼失したことも多いが、組織的に前代の資料の湮滅を企画したことはなかったので、比較的多くの文学の資料が伝存している。）の歴史は、一般に上代（飛鳥奈良）、中古（平安）、中世（鎌倉室町）、近世（江戸）、近代現代と時代区分されてきている。上代は、記紀的に神武東征以来とすると悠久の歴史ということになるが、まずは文字の伝来からとすると王仁が論語・千字文を献じた（古事記で応神十六年とするが、西暦では確定できないようである、大約四三〇年ころか）から、桓武天皇の平安遷都（延暦十三年、七九四）までを指し、中古は、平安遷都から源頼朝が征夷大將軍に任命される（建久二年、一一九一）までを指す。これを古代前期、古代後期と呼ぶ時代区分法もある。ともに貴族（皇族・公卿）が支配した時代と言えるからであろう。中世は、鎌倉幕府成立から室町幕府滅亡（元正元年、一五七三）を経て関ヶ原の戦による天下統一（慶長五年、一六〇〇）までを指し、武士が支配した時代である。近世は、徳川慶

喜に依る大政奉還（慶応三年、一八六七）までを指し、中世に続いて武士の支配が続いたが、町人の抬頭が著しい時代である。近代は、現代を含めて明治維新（明治元年、一八六八）以後の百数十年を指し、現代も歴史を作つていつていると考える。第二次世界大戦の終結、即ち日本帝国の崩壊を転機として、以後を現代と考える捉え方もあるが、明治維新以後を四民平等が曲がりなりに実現していった時代と考え、それが今も歴史を形成していると考えていいと思う。

このように見てくると、長短さまざまであるが、変革の動きを考えていくと、例えば中世は四百年に垂んとする星霜を経ているが、応仁の乱以後の戦国から安土桃山の時代を近世を生み出す変革の時と捉えれば、二百数十年の近世も三百年に近いと考えることが出来て、三百年の経過で各時代が交替していると捉え直すことが出来るようである。そしてこの三百年のスパーンで盛衰をくり返す各時代は、大よそ百年ぐらいのスパーンで成長期、成熟期、衰退期という現象を呈していることでもある。

そういう盛衰をくり返している日本の歴史の中で極東の島国である日本では、国際外交的に鎖国と呼ばれる時代があった。菅原道真が決断した遣唐使の廃止（寛平六年、八九四）は、中古という時代に一種の鎖国的状況をもたらし、豊臣秀吉のキリスタン禁教の布告（天正十七年、一五八九）は、徳川幕府の鎖国令発布（寛永十年、一六三三）に発展し、ペリー渡航による開国（安政元年、一八五四）に至るまで近世という時代に於ける二百数十年の鎖国があった。その鎖国の中で、平安文化と江戸文化と称される中国の文化を十分に吸収しながらも日本の特性を示すと称される文化が形成され、文学の世界でも秀れた達成度を示した作品が数多く生まれ出ているという事実がある。

如上の歴史的背景を有する日本古典文学の特色を探索しながら、文学作品に即して各時代の概観を記述する。

第一章 上代文学

上代文学概観

上代文学は、日本文学史上、古代前期文学とも飛鳥奈良時代文学とも称されるが、大和朝廷を中心に営為された文学である。魏志倭人伝に記された卑弥呼のころの部族社会から大和朝廷による日本統一がはかられた日本の歴史を反映して、文学の舞台は九州から関東という広い地域が選ばれている。伝存された文学作品は少ないが、韻文としては記紀歌謡（『古事記』『日本書記』に載る約一九〇首の歌謡を総称していう）と『万葉集』とがあり、歌体は大約片歌、四句体歌、施頭歌、仏足石歌、短歌、長歌である。これらは、日本文学の一つの特長となる五音と七音の組み合わせによって構成されているものばかりである。表記は漢字で、万葉仮名と称されるものである。また中国文化移入の時代相を反映して漢詩集『懷風藻』が伝存されている。

散文としては、『古事記』『日本書記』『風土記』とあり、表記は『古事記』が和臭漢文体、『日本書記』が純漢文体（近時、中国人の選述した卷々もあることが証されてきている）、『風土記』が和臭漢文体である。これらは史書・地誌であって、必ずしも文学ではないであろうが、神話や歌謡を含んでいて、伝存する数少ない文献として文学史上貴重なものとされている。これらの文学営為の最盛期とされるのは、柿本人麻呂が活躍した天武朝であり、記紀歌謡とされているのが成長期で、大友家持が短歌を量

産するところが衰退期としていいであろう。

第一節 韻文

1 万葉集

日本の最古の和歌集で、成立年未詳。二十巻の大歌集として完結されたのは天平宝字三年（七五九）ころか。撰者は確定的ではない。二十巻で、全歌数は四、五〇〇余首。大部分は短歌で約四、二〇〇首、ほかに長歌約二六〇首、施頭歌約六〇首、連歌と仏足石歌各一首。作者は天皇から遊女・乞食に至るあらゆる階層の人約四五〇に及び、その地域も大和をはじめ東国や九州にまで広がっている。『万葉集』の構成は、雑歌・相聞・挽歌の三大部立てである。しかし、複雑な成立事情を反映して、必ずしも統一がとれておらず、表現のしかたから、正述心緒歌・寄物陳思歌・譬喩歌に類別した巻もある。特に巻一四の東歌、巻一五の伝説歌・滑稽歌、巻二〇の一部にある防人歌は独特なものとして注目されている。歌の表記は、漢語・仏語などをそのまま用い、字訓もさまざま工夫されているが、特に一字一音の借音のものは万葉仮名と呼ばれ、代表的な表記とされている。

（短歌）

5・7・5・7・7音の五句から成る形式。後に和歌といえば、通常この形式をさすようになる。古代から現代にいたるまで制作されてきた。

(長歌) ちやうか

5・7……5・7・7の形式。5・7を単位に繰り返しながら、末尾を5・7・7の形でしめくくる。短いものから長大なものまで、さまざまある。また、ここでは対句的な言いまわしも多くとりこまれている。通常これには、反歌はんかとして、短歌形式の歌が付随する。万葉集の時代には、柿本人麻呂・山上憶良・高橋虫麿・大伴家持ら、男性官人の歌人たちによつて盛んに詠まれたが、平安時代以後はほとんど詠まれなくなった。

(旋頭歌) せとうか

5・7・7・5・7・7の形式。つまり、5・7・7を二度繰り返す六句形式の歌である。万葉集時代にしばしばみられるが、平安時代以後はほとんど詠まれなくなった。

(仏足石歌) ぶつそくせまか

奈良の薬師寺に残されている仏足石歌碑に刻まれている歌の歌体で、5・7・5・7・7の六句形式。短歌形式に、さらに7音句一句が加わった形である。この仏足石歌は、一種の仏教讃歌。また万葉集にも、ごく少数ながら、この歌体の歌がみられる。しかし平安時代以後にはない。

【ますらをぶり】『万葉集』に見られる男性的なおおらかな歌風。賀茂真淵の提唱した文学理念の一つ。

(枕詞) まくらことば

ある語句に具体的なイメージを与えるために、その語句の直前に置かれる五音からなる語。たとえば、「ちはやぶる」↓「神」、「たらちねの」↓「母・親」、「ぬばたまの」↓「黒黒髪・闇・夜・夢」などのように、枕詞とそのかかる言葉（被枕ひまくらともいう）が固定化したものが多

く、その発生はきわめて古い時代だったとみられる。古代において、言葉には靈魂が宿るとする言霊信仰から、特に崇高なもの、偉大なもの、恐るべきもの、大切なもの、美しいものなどを言う場合、こうした枕詞をふんだんに用いた。

そうした古くからの習慣的な枕詞があるとともに、他方では万葉時代以後も、かかりかたの固定的でない新しい枕詞も創始された。被枕へのかかり方から分類すると、次のように、(1)語義(比喩など)によるもの、(2)語音によるもの(a、掛詞式(後掲の純粹の掛詞とは異なる)・b、同音繰りかえし式、の二種)の二種に分類される。

(序 詞) ある語句に具体的なイメージを与える点では枕詞と同じであるが、序詞は音数が一定でなく、七音以上の長さになる。また、かかり方も固定的習慣的ではなく、作者の独創による詞句となっている。そして、序詞を多くは、自然の景物に関する叙述であり、それが心情を表す語句にかかっている。おおむね、序詞とそれのかかっている本旨とは、自然と心情が対応しあうしくみになっている。

かかり方から分類すると、枕詞の場合と同じく、(1)語義(比喩など)によるもの、(2)語音によるもの(a、掛詞式・b、同音繰りかえし式)の二種となる。

(掛 詞) 語音の同じ二語(同音異義の二語)を同時に重ねて用いる技法。ここでは、言葉に即した連想のおもしろみが強調されることになる。たとえば「待つ」と「松」を同時に表

すところから文脈が二重となり、複雑なイメージが生み出される。この二語は、一方が人間の心情や

状態を表し、他方が自然の景物を表すことが多い。その点では、自然と心情から成る序詞の表現の變形とみることもできよう。これは、古今集時代からの表現技法である。

(縁語) たとえば、海辺で塩を焼く景として「焼く」「藻塩」「こがる」などの言葉を配するよう

に、関連の深い語群を意識的に配する技法。この縁語として関連づけられる語群は、自然の景を表すことが多く、他方の心情を表す文脈と対応させられる関係になることが多い。これも、言葉の連想のおもしろさを強調して、複雑なイメージを生み出す。縁語だけ単独に用いられることもあるが、縁語群のどの語かが掛詞であることが、むしろ一般的である。掛詞とともに、古今集時代から用いられた。

額田王

熟田津 船乗世武登 月侍者 潮毛可奈比沼 今者許藝乞菜

① 熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな(巻一・八)
額田王

西草指 武良前野逝 標野行 野守者不見哉 君之袖布流

あかねさす 紫野行き標野行き 野守は見ずや君が袖振る(巻一・二〇)
柿本人麻呂

東 野炎 立所見而 反見為者 月西渡

いむかし 東の野に 炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ(巻一・四八)